

昔の言葉を使うか否かの相違点

三浦 響 23B13051

東京工業大学工学院

1. はじめに

昔と現代で使われる言葉、使われない言葉の相違点が分からなかったので、100年近く前の文章に出てくる頻出の単語を調べ、その中で出てきた単語で相違点を考えたところ、差別的な言葉かどうか大きな相違点になっているという結論に至った。

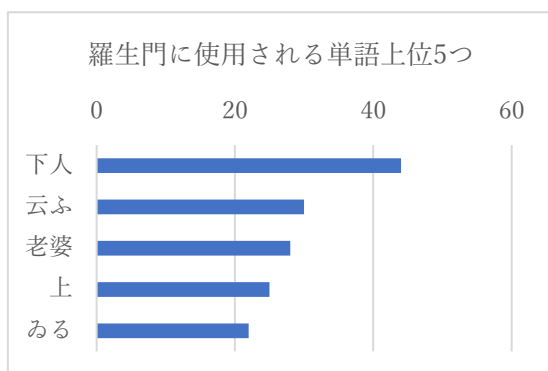
2. 方法

文章内に現れる単語の数を調べるソフトを用い、文章内に出てくる頻出単語を調べる。

その後100年以上の時代の流れの中で言葉の変化(使われる、使われないの相違点)について考察する。今回使う文章として、芥川龍之介の「羅生門」を題材とする。

3. 結果

下図のグラフに注目してもらいたい。縦軸の単語を見て、今でも使うかどうかを考えたい。



(図1,羅生門に使用される単語上位5つ)

4. 考察

図1を見て分かる通り、「羅生門」内で頻出の単語上位5つのうち「下人」「云ふ」「老婆」は、現代での意味は「奴隷」「言う」「おばあさん」という風に言い換えられる。

また、現代では「老婆」は文学史などで使われることはあるが、「下人」という単語はほとんど使われない。どちらも差別的な言葉に聞けるが、実際には微妙な違いがある。

その違いとは「蔑視語」と「差別語」にあると思う。「蔑視語」は「ののしり言葉」という意味で、「差別語」は「できあがったステレオタイプ」に「個人を強制的に所属させてしまう」という意味である。(*1)

昔の言葉が現代でも使われるかどうかの違いはここにあると考える。現代の日本は、平等であることが大事であり差別ということは決して許されない。しかし、蔑視はどうだろう。差別的な意味合いを込める場合もあるが、よりいろんな色合いを含んでいると思う。このような微妙な言葉の位置づけの違いが使われる、使われないの相違点だと考える。

5. おわりに

100年以上前の本の中で出てくる単語数を調べることで、昔と現代で使われる言葉、使われない言葉の相違点を考えると、それは蔑視か差別かによると考えた。

<文献>

(*1)田中克彦, 差別語から入る言語学入門, 明石書店, 2001, pp41-44